

大学生の困難課題解決のための努力維持要因の検討

廣瀬春香・服巻 豊・尾形明子

Effort for solving difficult problems among university students:
Why can they keep making efforts?

Hirose Haruka, Haramaki Yutaka, & Ogata Akiko

University students experience many difficult problems that can lead to mental illness. However, many students can solve these problems by making efforts to confront them. Previous research has showed that social support, generalized self-efficacy, future time perspective, task motivation, and difficulty of the problem are related to solving difficult problems; moreover, some of these factors are connected to each other. In this research, the primary aim was to identify the process of making an effort to confront problems, for which I have developed a hypothetical model. Additionally, students grow up in the four years of their university life. The second aim was to identify the difference between grades in the hypothesized process model. The questionnaire was completed by 399 students (96 freshmen, 95 sophomores, 89 juniors, 69 seniors, and 50 graduates). Covariance structure analysis was performed for the entire sample. The result supported the hypothetical model of making efforts, but some new connections were found. In other words, all psychological factors were complexly connected to each other. Then, I performed covariance structure analysis for my hypothetical model for each grade and compared the models. The results of this comparison showed that the strength of correlation of all factors were different across the grades. Although the factor of future time perspective had no effect on the model for the 1st grade, the effect increased with subsequent grades. Additionally, the effect of the factor of generalized self-efficacy increased with each grade.

キーワード : effort, problem, difficulty, students

問題

近年、大学への進学率は高まり続けており、高等学校卒業者の大学進学率は、平成 27 年には、54.6%に上った (文部科学省, 2015)。そして進学によって社会へ出る時期が遅くなる分、大学時代

は社会に出る準備期間として注目されている(畑野, 2010; 磯谷・岡林, 2012 ほか)。一方で, 大学生の不適応が問題となっている。日本学生支援機構の平成 26 年度学生生活調査(2016)によると, 大学生活についての不安や悩みを持っている学生の存在が明らかとなっており, 内容は『卒業後にやりたいことが見つからない』(『大いにある』・『少しある』の回答率 40.8%), 『授業の内容についていけない』(『大いにある』・『少しある』の回答率 35.2%), 『学内の友人関係の悩みがある』(『大いにある』・『少しある』の回答率 17.9%) が挙げられる。大学生活に適応するためには, これらの不安や悩みの原因となっている課題に取り組み, 解決させる必要があると考えられる。さらに, 学校への不適応について, 日本学生支援機構(2007)は, “大学生には入学から卒業にいたるサイクルの中で, 学年進行に伴った個別の課題とニーズがある”としている。以上を踏まえると, 学年ごとの悩みや不安といった課題の解決のために物事の取り組みを維持する要因を明らかにすることは, 大学生の大学への適応を維持・促進することにつながると考えられる。

物事への取り組みに影響する要因として動機づけがある。動機づけとは一般的に, 目標に向かってその行動を維持・調整する過程・機能をさす。また, Loche & Latheman(2002)は, 課題がどれほど困難かという認知が動機づけの高さに影響を及ぼすことを明らかにした。そこで市村・上田・楠見(2016)は, 実験者が事前に与える課題の困難度に関する情報が課題努力に及ぼす影響を, 課題に対する課題価値や結果期待, 内発的動機付け, 有能感といった動機づけとの関連から検討した。その結果, 課題努力には課題に対する動機づけの高さと困難度情報の交互作用があることを示し, 動機づけが低い場合であっても, 困難度が低いという情報があれば, 課題努力は促されるということを明らかにした。市村ら(2016)の研究は, 認知課題を用い, 外的に困難度情報を与えた研究であったが, 日常場面における様々な解決困難な課題についての動機づけや困難度認知が, 同様に解決努力を促す要因になると考えられる。

また, 課題への取り組みには自己効力感の強さも影響していると考えられる。自己効力感とは, Bandura(1977)によって提唱された概念で, 「行為に対する努力の持続性, 困難な経験に対してどれほど耐えられるかということに対する個人の確信」のと定義されており, 行為を始め, 維持し, 完了させる意思に影響するもの, とされている。そして坂野・東條(1986)は, 自己効力感を二つの水準に分けた。第1水準は, 「特定の課題や場面における行動に影響を及ぼすもの」で, Gist & Mitchell(1992)は『特異的自己効力感』と呼んだ。第2水準は, 「具体的な個々の課題や状況に依存せず, より一般化した日常生活における行動に影響するもの」で, 成田・下中・中里・河合・佐藤・長田(1995)は「ある種の特性的な認知傾向とみなせる」ことから, 『特性的自己効力感』と呼んだ。自己効力感が高いということは, 様々な物事に対しても, 解決のための行為を始め完了することができるといえる。また, 特性的自己効力感是新規場面に対しても適応的な対処が期待できることから, 学校生活の中で様々な新規場面に直面することが多い大学生にとっては, 解決困難な課題に対処する際に重要な要因と考えられる。そして, 課題が未解決であることによって, 将来的により大きな問題が生じることが予想されることは, 解決の必要性の程度に影響を与えると考えられる。このように, 過去から将来への時間的つながりの中で, 現在の自己の行動を捉えることを時間的展望という。Lewin(1951: 猪股訳, 1979)によると時間的展望とは, 「ある一定の時点における個人の心理的

過去および未来についての見解の総体」とされている。この時間的展望には、時間軸に照らし合わせて、過去展望・現在展望・未来展望の3つが存在し(勝俣, 1995), ひとつの時間軸の中で過去と現在と未来を関連付け、将来を展望した自己認識を行うことで、希望する人生への具体的な取り組みができるという(佐藤・志村・深谷, 2004)。特に、「青年期において時間的展望は急速に発達し、リアリティも高まる(都筑, 1993)」と同時に、今後の人生を決定するような重要な決断を迫られるため、肯定的な未来展望を築くことの重要性も明らかとなっている(比嘉・岡本, 2007)。つまり、未来展望を、自己の過去と現在に根ざした具体的で現実的なものとするのが、青年期に重要であり、そのような時間的展望を持つことで、困難な課題に対しても解決のために適応的な努力の維持ができるといえる。

以上に述べた、動機づけ、自己効力感、未来展望の要因の関連についての研究も多く行われている。自己効力感は動機づけに影響すること(金・嶋田・坂野, 1998)や、未来展望が動機づけに影響すること(富山, 2010)、さらに自己効力感が高ければ未来展望が高くなること(富安, 1997)や、自己効力感の高さが困難な課題に対する取り組みに影響を与えること(Loche & Latheman, 2002)が明らかとなっており、内的要因は複雑に影響しあっていると見える。

また、大学生活における不安に対して、ソーシャルサポートの有効性(服部・木村・首藤・馬場・坂井, 2010)や、課題の解決のためにソーシャルサポートを求めること(山本・近藤, 2015)が示されている。ソーシャルサポートとは、「特定個人が、特定の時点で、彼/彼女と関係を有している他者から得ている、有形/無形の諸種の援助(南・稲葉・浦, 1988)」と定義されていることから、ソーシャルサポートは大学生活で生じる様々な不安や悩みといった課題を解決するための、外的な要因といえる。また、福岡(2008)によると、ソーシャルサポートによって自己効力感が高まると、動機づけが高まり、適応的な対処を生起させることを明らかにした。また、ソーシャルサポートは時間的展望を高めることが明らかとなっている(白井, 2006)。以上より、外的に与えられるソーシャルサポートが、内的な心理的要因に影響を与え、解決行動の生起・維持につながるといえる。

以上より、困難な課題に対する解決努力の維持には、複数の内的要因や外的要因であるソーシャルサポートが複雑に影響しあっていると考えられる。しかし、複数の概念を統合した包括的な努力維持プロセスについての研究は行われていない。課題に対する努力維持について、外的に得られるソーシャルサポートと、それによって高められる内的要因である、動機づけ、自己効力感、未来展望と、動機づけとの交互作用のある困難度認知を、一つの研究の枠組みの中で検討することで、実生活により近い努力維持プロセスを明らかにすることにつながる。そこで本研究では、大学生活の中で生じる解決の困難な課題を『困難課題』、困難課題を解決するために行われる適応的な対処努力を『努力』とし、困難課題解決のための努力維持の統合的な心理的プロセスを明らかにすることを目的1とする。先述した先行研究より、ソーシャルサポートは自己効力感と未来展望を介して動機づけを高め、努力維持を促進すること、自己効力感と未来展望を高めて動機づけを高めることと、努力行為に直接影響すること、困難度は動機づけとの交互作用によって努力に影響すること、を踏まえ仮説モデルとして Figure 1 を設定する。

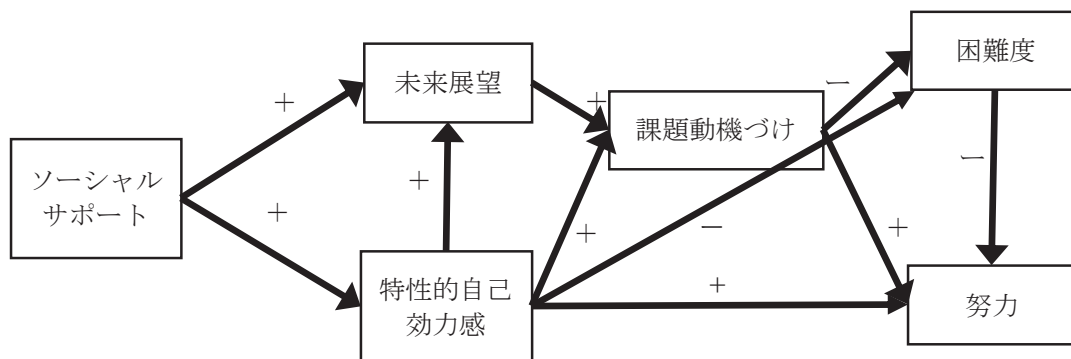


Figure 1. 困難課題に対する解決努力維持の心理プロセス (仮説モデル)

また、日本学生支援機構 (2007) より、大学院生を含む大学生には学年進行に伴った個別の課題とニーズがあることが明らかとなっている。そして、直面している課題の質が異なることは、それに対処する心理的プロセスも異なると考えられる。そこで、学年ごとの努力維持モデルを作成することを目的2とする。

方法

対象 A大学に通う、大学生・大学院生 474名を対象とした。このうち、回答に欠損のあった75名を除く、399名を分析対象とした (年齢範囲 18歳～43歳、平均年齢 20.78歳、標準偏差=3.874)。学年の内訳は、1年生 96名、2年生 95名、3年生 89名、4年生 69名、大学院生 50名であった。

調査方法 無記名の質問紙調査を縁故法で行った。

調査時期 2016年11月から12月にかけて実施した。

質問紙

フェイスシート 性別、学校区分、学年、年齢、所属を回答項目とした。

ソーシャルサポート 片受・大貫 (2014) が作成した大学生用ソーシャルサポート尺度を用いた。和田 (1989) によると、ソーシャルサポートは機能によって5つに分類でき、片受・大貫 (2014) が作成した尺度は、大学生の知覚されたソーシャルサポートについて、『評価的サポート』10項目、『情報・道具的サポート』7項目、『情緒・所属的サポート』6項目の合計23項目を用いて、5つの機能を3因子で測定できる。各質問項目について、「1: 全く当てはまらない」～「4: よくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

特性的自己効力感 成田ほか (1995) が作成した特性的自己効力感尺度を用いた。1因子、23項目で構成されている。それぞれの項目について、「1: そう思わない」～「5: そう思う」の5件法で回答を求めた。

未来展望 白井 (1994; 1997) が作成した時間的展望体験尺度のうち、大石・岡本 (2009) より抽出された未来志向性因子の8項目を用いた。それぞれの項目について、「1: あてはまらない」～「5:

あてはまる」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど未来に関する時間的展望が肯定的に持っていることを指す。

困難課題の想起 直面した困難課題をどのようにとらえているかを明らかにするために、困難課題を想起させ、より具体的にするためにその内容の回答を求めた。教示は、「あなたが最近経験した、解決に多大な努力がいたと感じた悩み又は課題の中で、何とか解決できたものを一つ書いて下さい。もしくは、現在経験している、解決に多大な努力がいたと感じる悩みもしくは課題の中で、大変ではあるものの解決のために取り組み続けているものを一つ書いて下さい。」とした。また、その経験時期を「過去／現在」の選択肢から、その内容分類を「学業／人間関係／将来／家庭／その他」の選択肢の中からの回答を求めた。さらに、主観的困難度について、10段階での回答を求めた。得点が高いほど、課題に対する主観的な困難度が高いことを指す。

課題動機づけ 市村ほか (2016) が使用した課題動機づけ尺度を本研究に合う形で修正して使用した。課題に対する動機づけを測定するもので、『課題価値』4項目、『結果期待』6項目、『内発的動機づけ』5項目、『有能感』3項目の、4因子18項目であった。それぞれの項目について、「1：そう思わない」～「5：そう思う」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど課題に対する動機づけが高いことを指す。

努力度 困難課題について、参加者自身がどれほど努力できたと感じているかを明らかにするために、主観的な努力度を10段階で回答を求めた。得点が高いほど、困難課題に対する主観的な努力度が高いことを指す。

倫理的配慮

調査への回答は任意であり回答の途中で回答をやめてもよいこと、調査で得られたデータについては統計的に処理をし、個人が特定できないようにすること、データの管理は厳重に行われること、回答をもって調査協力への同意とみなすこと、を質問紙表紙に明記した。また、情報処理については、情報の暗号化を施し、パスワードを設定し、情報処理を行うコンピュータは、OSのアップデートを行いウイルス対策の施されたものを使用した。記録媒体を接続する際は、コンピュータのLANケーブルを抜く、無線LAN機能を停止する、機内モードに設定するなどにより、意図しないインターネット接続を防止した。収集した情報、およびその処理結果を保存するUSBメモリについては、万一の紛失や盗難に備えて、鍵付きロッカーのある管理部屋 (A821：責任教員；服巻豊) にて慎重に管理し、極力学外には持ち出さないようにした。本調査の実施については、広島大学教育学研究科倫理審査委員会の承認を受けた。

結果

相関分析

各尺度の α 係数を算出したところ、ソーシャルサポート尺度は $\alpha=.946$ 、特性的自己効力感尺度は $\alpha=.827$ 、未来展望尺度は $\alpha=.850$ 、課題動機づけ尺度は $\alpha=.915$ であった。また、各項目について検討を行ったところ、 α 係数を大きく下げている項目は見られなかった。そのため、全ての項目を採

用し、各尺度の尺度得点を算出した。

ソーシャルサポート、特性的自己効力感、未来展望、課題動機づけが、課題の認知である困難度と、その課題に対する取り組みである努力度に対してどのように影響を及ぼすかを明らかにするために相関分析を行った (Table 1)。ソーシャルサポートは、特性的自己効力感と未来展望、課題動機づけとの間に弱い正の相関があった。特性的自己効力感は、未来展望との間に中程度の正の相関があり、課題動機づけとの間に弱い正の相関があった。未来展望は、課題動機づけとの間に弱い正の相関があった。課題動機づけは困難度との間に弱い負の相関があった。困難度は努力との間に弱い正の相関があった。

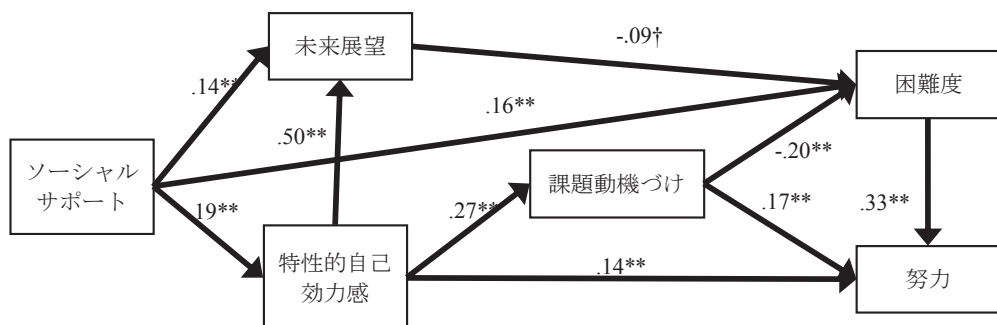
Table 1
各学年の尺度の記述統計と相関分析の結果

	M	SD	1	2	3	4	5	6
1 ソーシャルサポート	78.013	10.725	1.000					
2 特性的自己効力感	69.940	11.026	.194 **	1.000				
3 未来展望	25.419	6.402	.238 **	.525 **	1.000			
4 課題動機づけ	65.674	12.415	.181 **	.267 **	.249 **	1.000		
5 困難度	6.960	2.108	.098 *	-.125 *	-.108 *	-.200 **	1.000	
6 努力	6.466	2.279	.045	.147 **	.104 *	.143 **	.275 **	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

努力維持モデルの検討

想定していたモデルについて最尤法を用いた共分散構造分析を行った (Figure 2)。モデルの適合度は $N=399$, $CFI=.960$, $RMSEA=.074$ であり、適合度は十分であるといえる。得られた努力維持モデルの結果について、パス係数の有意確立が 10%未満のものについて述べる。ソーシャルサポートは、特性的自己効力感、困難度、未来展望へ正の影響を与えていた (すべて $p < .01$)。特性的自己効力感は、未来展望、課題動機づけ、努力へ正の影響を与えていた (すべて $p < .01$)。未来展望は、困難度に負の影響を与えていた ($p < .10$)。課題動機づけは、困難度に負の影響を、努力に正の影響を与えていた (すべて $p < .01$)。困難度は努力に正の影響を与えていた ($p < .01$)。



** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

$CFI=.960$, $RMSEA=.074$

Figure 2. 全体を対象とした努力維持モデル

複数の要因間で、有意な直接のパスと他の要因を介した有意なパスが両方認められたため、媒介分析を行ない、各要因が媒介要因として機能しているかを検討した。本研究においては、サンプル数が399であったため、Aroian法を採用した。結果をTable 2に示す。

まず、ソーシャルサポートを独立変数、特性的自己効力感を媒介変数、未来展望を従属変数とした媒介分析を行った。その結果、標準化直接効果は $\beta=.238$ ($p<.01$) で標準化間接効果は $\beta=.141$ ($p<.01$) であり、有意だった ($z=3.719, p<.01$)。直接効果も間接効果も共に見られたため、特性的自己効力感とはソーシャルサポートと未来展望を部分媒介しているといえる。ソーシャルサポートを独立変数、未来展望を媒介変数、困難度を従属変数とした媒介分析を行った結果、標準化直接効果は $\beta=.098$ ($p<.05$) で標準化間接効果は $\beta=.132$ ($p<.01$) であり、有意だった ($z=-2.350, p<.05$)。直接効果も間接効果も共に見られたため、未来展望は特性的自己効力感と課題動機づけを部分媒介しているといえる。特性的自己効力感を独立変数、課題動機づけを媒介変数、努力を従属変数とした媒介分析を行った結果、標準化直接効果は $\beta=.147$ ($p<.01$) で標準化間接効果は $\beta=.117$, ($p<.05$) であり、有意だった ($z=1.995, p<.05$)。直接効果も間接効果も共に見られたため、課題動機づけは特性的自己効力感と努力を部分媒介しているといえる。最後に、課題動機づけを独立変数、困難度を媒介変数、努力を従属変数とした媒介分析を行った。その結果、標準化直接効果は $\beta=.143$ ($p<.01$) で標準化間接効果は $\beta=.206$ ($p<.01$) であり、有意だった ($z=-3.428, p<.01$)。直接効果も間接効果も共に見られたため、困難度は課題動機づけと努力を部分媒介しているといえる。

Table 2
全体モデル媒介分析結果

独立変数	媒介変数	従属変数	直接効果	間接効果	Z値
ソーシャルサポート	特性的自己効力感	未来展望	.238**	.141**	3.719**
ソーシャルサポート	未来展望	困難度	.098*	.132**	-2.350*
特性的自己効力感	課題動機づけ	努力	.147**	.117*	1.995*
課題動機づけ	困難度	努力	.143**	.206**	-3.428**

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

学年ごとの検討

学年分類は、1年、2年、3年、4年、大学院生とし、学年ごとの努力維持の要因を検討するために、ソーシャルサポート、特性的自己効力感、未来展望、課題動機づけの尺度得点を使用して相関分析を行った (Table 3)。

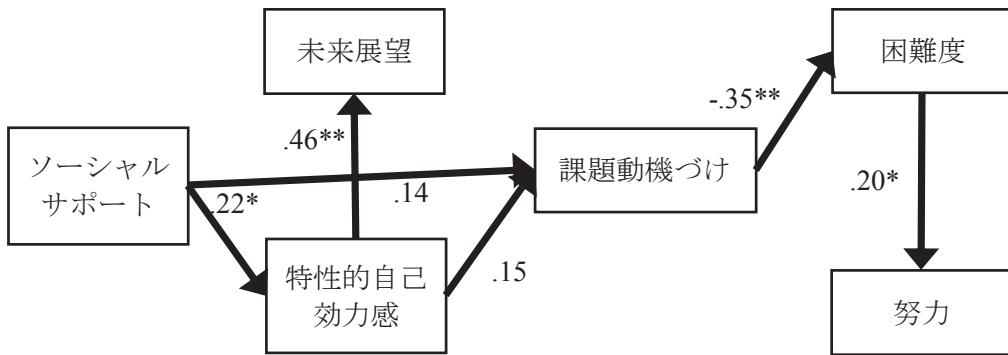
Table 3
各学年の尺度の記述統計と相関分析の結果

	M	SD	1	2	3	4	5	6
1年生 (N=96)								
1 ソーシャルサポート	77.292	11.684	1.000					
2 特性的自己効力感	68.771	11.498	.219 *	1.000				
3 未来展望	25.458	7.161	.211 *	.455 **	1.000			
4 課題動機づけ	65.667	11.946	.171 †	.179 †	.112	1.000		
5 困難度	6.958	2.181	.142	-.093	.016	-.353 **	1.000	
6 努力	6.188	2.296	.019	.207 *	.092	.118	.203 *	1.000
2年生 (N=95)								
1 ソーシャルサポート	79.358	11.020	1.000					
2 特性的自己効力感	70.347	11.412	.335 **	1.000				
3 未来展望	26.200	6.231	.269 **	.569 **	1.000			
4 課題動機づけ	66.368	13.991	.234 *	.310 **	.289 **	1.000		
5 困難度	6.968	1.992	.013	-.189 †	-.081	-.092	1.000	
6 努力	6.263	2.237	.132	.101	.168	.174 †	.315 **	1.000
3年生 (N=89)								
1 ソーシャルサポート	78.483	11.195	1.000					
2 特性的自己効力感	69.629	10.238	.084	1.000				
3 未来展望	24.247	6.113	.184 †	.468 **	1.000			
4 課題動機づけ	66.022	12.530	.155	.166	.345 **	1.000		
5 困難度	6.697	2.288	.095	-.205 †	-.305 **	-.218 *	1.000	
6 努力	6.236	2.426	-.013	.063	.060	.179 †	.187 †	1.000
4年生 (N=69)								
1 ソーシャルサポート	76.145	9.452	1.000					
2 特性的自己効力感	69.275	10.015	.088	1.000				
3 未来展望	24.942	5.831	.130	.657 **	1.000			
4 課題動機づけ	64.232	10.065	.151	.249 *	.284 *	1.000		
5 困難度	7.275	1.932	.044	.027	-.177	-.223 †	1.000	
6 努力	6.826	2.183	.077	.094	.049	.006	.318 **	1.000
大学院生 (N=50)								
1 ソーシャルサポート	78.580	8.800	1.000					
2 特性的自己効力感	72.880	11.883	.132	1.000				
3 未来展望	26.600	6.266	.495 **	.531 **	1.000			
4 課題動機づけ	65.740	13.158	.137	.509 **	.268 †	1.000		
5 困難度	6.980	2.104	.325 *	-.111	-.030	-.063	1.000	
6 努力	7.300	1.992	.057	.252 †	.124	.275 †	.493 **	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

学年ごとの相関分析により明らかとなった相関関係を参考に、共分散構造分析を行った。

1年生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 3)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(9) = 16.847$; $p > .05$; CFI=.846; RMSEA=.095)。

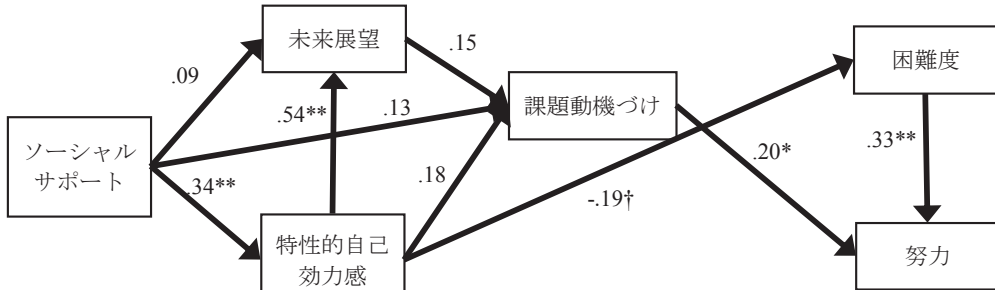


** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=.846, RMSEA=.095

Figure 3. 1年生努力維持モデル

2年生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 4)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(6) = 3.612$; $p > .10$; CFI=1.000; RMSEA=.000)。

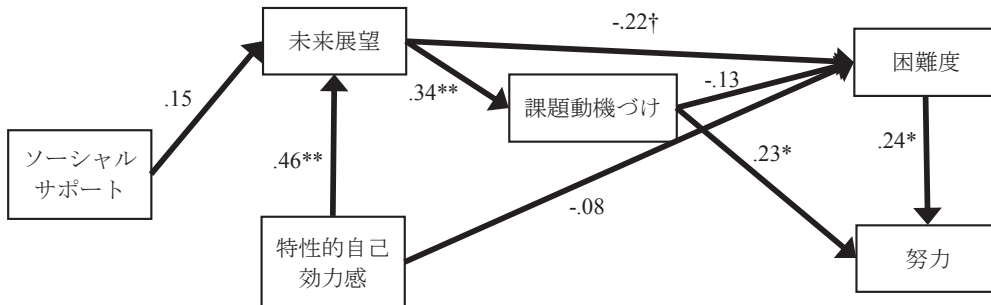


** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=1.000, RMSEA=.000

Figure 4. 2年生努力維持モデル

3年生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 5)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(6) = 5.094$; $p > .10$; CFI=1.000; RMSEA=.000)。

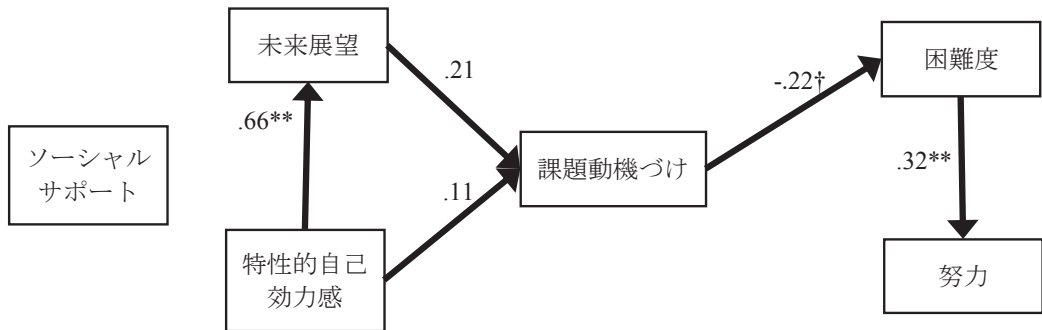


** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=1.000, RMSEA=.000

Figure 5. 3年生努力維持モデル

4年生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 6)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(9) = 7.800$; $p > .10$; CFI=1.000; RMSEA=.000)。

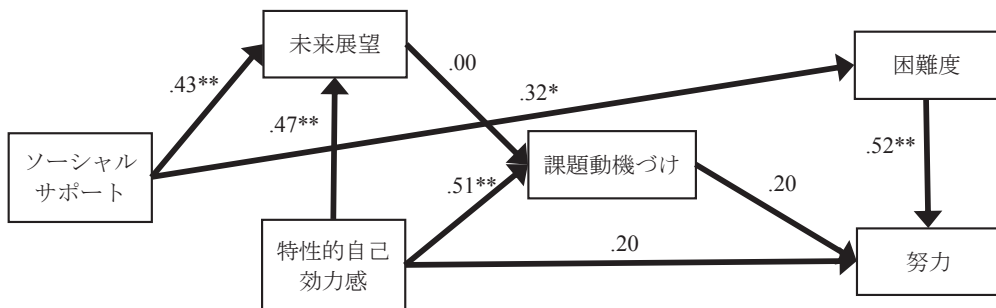


** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=1.000, RMSEA=.000

Figure 6. 4年生努力維持モデル

大学院生モデル 得られた相関関係を参考に、共分散構造分析を行った (Figure 7)。モデルの適合度は妥当といえる ($\chi^2(6) = 6.730$; $p > .10$; CFI=.991; RMSEA=.049)。



** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

CFI=.991, RMSEA=.049

Figure 7. 大学院生努力維持モデル

考察

本研究の目的は、大学生活の中で生じる困難課題に対する努力維持の統合的な心理的プロセスについて、仮説モデルに基づいて検討を行うことと、学年ごとの努力維持モデルを作成することであった。

困難課題に対する努力維持のプロセス

困難課題に対する努力維持のプロセスについて、想定していたモデルと相関分析の結果を参考に作成されたモデルについて、良好な適合度が得られた。モデルより、直接努力に影響を与える要因は、パス係数の強さの順に困難度、課題動機づけ、特性的自己効力感であることが明らかとなった。また、媒介分析の結果から、ソーシャルサポートは特性的自己効力感、未来展望を少なくとも媒介し、課題動機づけや困難度へと影響し、そして困難度が努力へと影響していることも明らかとなった。この結果は、ソーシャルサポートが自己効力感を媒介して動機づけに影響するとした先行研究 (福岡, 2008) や、ソーシャルサポートが時間的展望に影響し (白井, 2006)、未来展望は動機づけを高める (當山, 2010) という先行研究の結果に一致する。また、動機づけが高いことが努力の維持

に影響することは、動機づけの定義に従うものと考えられる。さらに、特性的自己効力感は動機づけを介して努力に影響するという結果は、山田・堀・國田・中條 (2009) の研究に一致している。また、直接努力に影響するという結果は、特性的自己効力感の定義に一致する。一方、仮説とは異なり、ソーシャルサポートから困難度に有意な正のパスが引かれた。この結果については、ソーシャルサポートによって困難度が高まったのではなく、周囲のサポートがあることが、困難と感じることに對しても積極的に直面することにつながり、結果的に認知した困難度が高まったと考えられる。

以上より、大学生の困難課題に対する努力維持には、ソーシャルサポート、特性的自己効力感、未来展望、課題動機づけ、困難度すべての要因が関連し、またこれらの要因同士が複雑に影響しあっていることが確認された。つまり、要因のうちのどれかが低くとも、他の要因が高まることで補うことができると考えられる。特に、ソーシャルサポートは、特性的自己効力感、困難度、未来展望に正のパスがあることが確認できた。よって、努力維持につながる内的要因の中で、足りない部分を補えるようなソーシャルサポートが得られると、内的要因が高まり課題解決への努力が維持されるということが示唆された。

学年ごとの検討

大学1年生から大学院生までの努力維持プロセスを比較すると、困難度が努力に与える正の影響は、学年が上がるにつれて大きくなっていった。これは、日本学生支援機構 (2007) より、学年進行に伴って大学生が直面する課題が、社会進出の準備や卒業の準備という、より長期間でより労力の必要なものへと変化していき、より解決困難な課題へと変化していくためと考えられる。

また、大学1年生から3年生の努力維持モデルを比較すると、大学在学中に時間的展望が努力プロセスに及ぼす影響が徐々に大きくなっていく可能性が示唆された。これは、大学在学中に、未来展望が発達することで、未来がより現実的で現在と関連のあるものになっていき、現在の困難課題に対する努力に影響を与えるようになるということを示唆しており、“同じ大学生でも1年生と4年生では時間的展望が大きく異なる”という都筑 (1993) の予想を支持するものである。しかし、4年生のモデルでは未来展望の影響は有意ではなかった。時間的展望とは、Lewin (1951: 猪股訳, 1979) によると「ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体」と定義されており、今回使用した尺度は、未来についてのポジティブな見解が持っているかというものを測定するものであった。4年生という時期は、“卒業に向けた活動が行われる時期”あり (日本学生支援機構, 2007)、就職活動を行うことで自己の将来について深く考え、卒業論文を執筆することで自己と向き合う時期と考えられる。またそれらの課題は同時に解決が困難な課題でもあり、明るい未来の展望を持ちにくい課題とも考えられる。そのため、課題に直面しているときには、取り組んでいる課題についてポジティブな未来展望を持つことができなかったことが、有意な影響がなかった要因と考えられる。

大学1年生から4年生のモデルを比較すると、1・2年生では外的要因であるソーシャルサポートが内的要因である特性的自己効力感を高めていたが、3・4年生ではその影響がなかった。その理由として、今回調査を行った時期は、11月であり大学3年生では就職活動が本格化し、大学4年生で

は卒業研究の活動が本格化する時期であることが考えられる。いずれの活動も将来が決まる重要なイベントであり、困難度も高いと考えられる。さらに、個人での活動が求められるものでもあり、他人とのかかわりが減りやすいと考えられる。そのため、個人での活動による関りの少なさによって、ソーシャルサポート受容感に他の学年との違いがあったと考えられる。

一方で大学院生の努力維持モデルは学年進行の流れとは大きく異なり、ソーシャルサポートと特性的自己効力感の努力維持プロセスへの影響が大きくなるという結果となった。大学院生は、進学によって大学時代とは異なる環境に移るため、研究者として研鑽を積み社会との関連の模索していく必要がある時期であり、様々な研究や対話を通して自己の研究を完成させていくことが求められる時期といえる。そのため、周囲の人々のサポートを必要とすると考えられる。また、特性的自己効力感の動機づけに強く影響していた。これは、これまでの経験によって自分の能力をポジティブに評価できるようになり、自信から課題の意味づけがポジティブになり、努力ができるようになるためと考えられる。

本研究の課題と展望

本研究では、困難課題に対する努力維持の統合的な心理的プロセスを明らかにすることと、学年ごとの努力維持プロセスを明らかとすることを目的とした。結果、ソーシャルサポート、特性的自己効力感、未来展望、動機づけ、困難度の各要因が努力維持に複雑に影響し合っていることが明らかとなった。また、学年ごとのプロセスの特徴を明らかにすることもできた。しかし、本研究の限界として、大学生が直面する困難課題の内容が、努力維持のプロセスにどのように影響するのかということを、明らかにすることはできなかったことが挙げられる。大学生の日常生活で直面する困難課題は複数考えられ、直面する課題が自己の学業に関する事か、他者が存在することで生じる人間関係に関する事かという違いだけでも、解決に必要な心理的要因は異なると考えられる。したがって今後の研究の課題は、困難課題をどのジャンルに分類したかによる、別の視点からの努力維持のプロセスを検討していくこととする。

引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Gist, M. E., & Mitchell, T. R. (1992). Self-efficacy: A theoretical analysis of its determinants and malleability. *Academy of Management Review*, 17, 183-211.
- 畑野 快 (2010). 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性. *教育心理学研究* 58, 404-413.
- 服部正嗣・木村諭史・首藤祐介・馬場史津・坂井 誠 (2010). 大学生活不安とソーシャル・サポートの関連. *日本行動療法学会大会発表論文集*, 63, 372-373.
- 比嘉麻美子・岡本祐子 (2007). 信頼感を基盤とした未来展望形成プロセス. *広島大学心理学研究* 7, 227-243.

- 福岡欣治 (2008). 大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応：自己充實的達成動機の媒介的影響 静岡分化芸術大学研究紀要 8, 69-77.
- 市山賢士郎・上田祥行・楠見 孝 (2016). 課題動機づけにおける困難度情報が課題努力に及ぼす影響 心理学研究, 87 (3), 262-272.
- 磯谷俊二・岡林秀樹 (2012). 大学生の友人関係におけるソーシャルサポートの授受と自我同一性の関連 明星大学心理学年報 30, 7-16.
- 片受 靖・大貫尚子 (2014). 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—評価的サポートを含む多因子構造の観点から— 立正大学心理学研究年報, 5, 37-46.
- 勝俣暎史 (1995). 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要 (人文学科) 44, 307-318.
- 金 外叙・嶋田洋徳・坂野雄二 (1998). 慢性疾患患者におけるソーシャルサポートとセルフ・エフィカシーの心理的ストレス軽減効果 心身医学, 38, 317-323.
- Loche, E. A., & Latheman, G. P. (2002). Building a practically useful theory of goal setting motivation: A 35-year odyssey. *American Psychologist*, 57, 705-717.
- Lewin, K. (1951). *Field theory and social science*. New York: HarperCollins Publishers.
- (レヴィン, K. 猪股佐登留 (訳) (1979). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 南 隆男・稲葉昭英・浦 光博 (1988). ソーシャルサポート研究の活性化に向けて—若干の資料— 哲学, 85, 151-184.
- 文部科学省 (2015). 平成 27 年度学校基本調査 (確定値) の公表について 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/01/18/1365622_1_1.pdf (2015 年 12 月 25 日)
- 成田健一・下中順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究, 43 (3), 306-314.
- 日本学生支援機構 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・共同」— 日本学生支援機構 Retrieved from <http://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/jyujitsuhosaku.html> (2016 年 10 月 25 日)
- 日本学生支援機構 (2015). 平成 26 年度学生生活調査 日本学生支援機構 Retrieved from https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/2014.html (2016 年 10 月 27 日)
- 大石郁美・岡本祐子 (2009). 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連 広島大学大学院心理臨床研究教育センター紀要, 8, 43-53.
- 坂野雄二・東條光彦 (1986). 一般性セルフエフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, 12, 73-82.
- 佐藤文子・志村結美・深谷純子 (2004). 時間的展望における自己認識と生活実践 千葉大学教育学部研究紀要 52, 103-108.
- 白井利明 (2006). 現代社会における青年期の不安と自己—進学競争のもとでの時間的展望— 心理科学 26 (1), 13-25.

- 都筑 学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究 41, 40-48.
- 富安浩樹 (1997). 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, 45, 329-336.
- 當山明華 (2010). 高校生の学習動機づけと将来展望に関する研究 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58 (2), 329-340.
- 山田恭子・堀 匡・國田祥子・中條和光 (2009). 大学生の学習方略使用と達成動機, 自己効力感の関係 広島大学心理学研究 9, 37-51.
- 山本純子・近藤純子 (2015). 看護系大学の新生が求めるソーシャル・サポートの特徴ー社会的スキルとの関連からー 千里金蘭大学紀要 12, 81-88.
- 和田 実 (1989) . ソーシャル・サポート (Social Support) に関する一研究 東京学芸大学紀要1部門 40, 23-38